

夢再び

モンゴル恐竜調査隊

「若手を育成しなければ」。ツオクトバートル博士と私が飲むと、いつもこの話題になる。

モンゴル科学アカデミー古生物学地質学研究所の所長を務める彼にとって、モンゴルの恐竜や古生物、地質学など、自然科学研究の次代を担う若手の育成は待たなしの課題である。

独立国家ではあったもののソビエト連邦一辺倒の体制を続けていたモンゴルは、自然科学研究でもソ連や旧共産圏に依存していた。ところが1991年のソ連解体で状況が一変し、新たな体制で研究所を運営していく必要に迫られた。

モンゴル科学アカデミーの各研究所は、その後さまざまな国との共同研究プロジェクトに取り組みようになり、近代化と若手の育成を進めている。しかし、パートナーとなる国それぞれの事情や、個々の研究者の事情など課題は多い。

「日本人に期待している」とツオクトバートル博士はしみじみと言う。「日本人は調査対象としてだけの目でモンゴルを見ることはない。だから自分の研究上の目的を達成したらさっさと引き上げるようなことはしない。双方に利益がある方法

石垣 忍

⑬ 後継者の育成

一緒に考えようとすることから」

全ての日本人がそうとは思わないが、少なくとも林原―モンゴル共同調査隊はこの考え方を実践し、モンゴル

と日本の信頼に基づく協力体制を作り上げた。林原のスタッフの努力もあってさまざまな援助も取り付け、モンゴルの研究所は建物も設備も大きく改善された。それは学術的成果と共に、「一緒に発展する」を合言葉とする同隊の大きな成果であった。

現在、岡山理科大とモンゴルの共同

刺激しながら学ぶ場を

調査はそれを引き継いでいる。林原自然科学博物館との違いは、岡山理科大は学生を教育する機関だということである。

「若い研究者育成に期待する」。2013年10月、岡山理科大とモンゴル科学アカデミー古生物学センター(その後「古生物学地質学研究所」に改称)が研究教育協定を結んだその場で、モンゴル側代表団の一人ツオクトバートル博士が私に言ったことである。

「若い研究者が育たないと、研究の積み重ねが途絶えてしまう。それにモンゴル人が自らの手でモンゴルの研究をしっかりと進めるといいう立ができない。この協定をもとに日蒙両国の学生が研究を進めて学位も取れるようなシステムを作ってほしい」と続けた。

ツオクトバートル博士は柔和温厚な人柄である。しかしその日の言葉には強くて深い思いがこもっていた。

岡山理科大の恐竜・古生物学コースには日本全国から化石研究を目指す学生が集まる。一方モンゴルにも同じ志の学生がいる。彼らが共に刺激しながらモンゴルと日本で学ぶ場を作ることが、岡山理科大研究者の大きな仕事である。



ツオクトバートル博士(右)と私(今年の9月にモンゴルであった国際シンポジウムの懇親会で)

(岡山理科大教授)

＝ 随時掲載